

大中華文庫

漢日對照



大中華文庫

漢日對照

紅樓夢

紅樓夢

VI

大中华文库

汉日对照

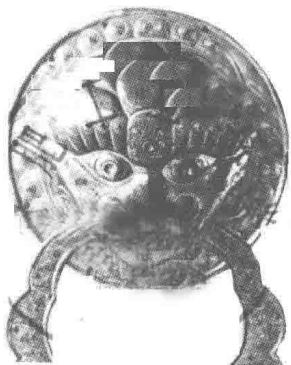
大中華文庫

漢日対照

红楼梦

紅樓夢

VI



曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 訳

人民文学出版社

人民文学出版社

第七十四回

惑奸谗抄检大观园 矢孤介杜绝宁国府

话说平儿听迎春说了，正自好笑，忽见宝玉也来了。原来管厨房的柳家媳妇之妹，也因放头开赌得了不是。这园中有素与柳家不睦的，便又告出柳家来，说他和他妹子是伙计，虽然他妹子出名，其实赚了钱两个人平分。因此凤姐要治柳家之罪。那柳家的得了此信，便慌了手脚，因思素日与怡红院人最为深厚，故走来悄悄的央求晴雯金星玻璃等人。金星玻璃告诉了宝玉。宝玉因思内中迎春之乳母也现有此罪，不若来约同迎春讨情，比自己独去单为柳家说情又更妥当，故此前来。忽见许多人在此，见他来时，都问：“你的病可好了？跑来做什

么？”宝玉不便说出讨情一事，只说来看二姐姐。当下众人也不在意，且说些闲话。平儿便出去办累丝金凤一事。那王住儿媳妇紧跟在后，口内百般央求，只说：“姑娘好歹口内超生，





第七十四回

奸讒に惑いて 大觀園を抄検すること
孤介を誓いて 寧国邸と杜絶すること

さて、平児は迎春のその言種に吹き出しかねないところでした。そこへひょっこり宝玉までが来合わせたのです。

いったい料理部屋を取りしきっている柳の妻女のその妹というのも、てら銭取って賭場を開いていたかどで咎められたくちでしたが、この園内には、かねがねこの柳の妻女とは不仲の者がいて、得たりとまた柳の妻女のことまで垂れこみ、あの女は妹と組んでいて、妹の名目にしてあるものの、その実、上がりがあると二人で分けあっている、などと言いつてますので捨ててもおけず、熙鳳も柳の妻女を処罰しようとしません。柳の妻女の方ではそういう報せがはいったもので、とたんにはたばたしはじめ、日頃怡紅院づきの者たちとはごく懇意にしているところから、思い立って出かけてきて晴雯や金星玻璃といった者たちに内々頼みこみました。金星玻璃から宝玉にこの話をします。宝玉はそこで迎春の乳母もその罪に問われている現在、いっそのこと迎春を語らい連れ立ってお慈悲を願いにいった方が、自分一人で柳の妻女のために詫びを入れてやりにゆくよりもぐあいがよかろうと思案して、それがためこちらまで出向いてきた次第。ところがひよいと目をやると、大勢こちらに寄っていて、宝玉の顔を見るなり、みな口々に、

「ご病気はもう好くなられたの？こんなところまで出ていらして、なんのご用？」

とたずねるではありませんか。宝玉もお慈悲を願いにゆく一件を口に出すのはさすがにはばかられ、迎春姉さんに会いにきたのだとだけいっておきます。

そのときは一同、気にもかけずに、雑談を始めます。平児はそれを機会に、罌絲金鳳の一件を片づけようと出てゆきました。例の王住児の妻女はその尻にへばりついて、しきりとおがみ倒しにかかり、

「お姉さん、後生ですから、なんとかひとつお取りなしのほどを。」



我横竖去赎了来。”平儿笑道：“你迟也赎，早也赎。既有今日，何必当初！你的意思得过去了就过去了。既是这样，我也不好意思告人，趁早取了来，交与我送去，我一字不提。”王住儿媳妇听说，方放下心来，就拜谢。又说：“姑娘自去贵干，我赶晚拿了来，先回了姑娘再送去，如何？”平儿道：

“赶晚不来，可别怨我。”说毕，二人方分路各自散了。平儿到房，凤姐问他：“三姑娘叫你作什么？”平儿笑道：“三姑娘怕奶奶生气，叫我劝着奶奶些，问奶奶这两天可吃些什么。”凤姐笑道：“倒是他还记挂我。刚才又出了一件事，有人来告柳二媳妇和他妹子通同开局，凡他妹子所为，都是他作主。我想你素日肯劝我，多一事不如省一事，就可闲一时心，



いずれにしても現品は請け出してまいります」

平児は笑って、

「あんたもあんた、早晩いずれは請け出さなければならないものなら、いまになってじたばたする前に、初めからそんなことはせずにおいたらよかったのに！まあなろうことなら、そのまもうやむやにというのがあんたの腹だったのでしょうかね。もっとも、いまのようにするとおいいなら、わたしだと言いつけてみたところで別段よい気持がするわけのものでもなし、一刻もはやく現物を取ってきて、わたしのところまで届けてもらいましょうよ。そうしたら、わたし、ひとこともいわないことにします」

王住児の妻女もそういわれて、やれやれとひと安心。さっそくペコペコお辞儀をして礼を述べます。そしてまた、

「お姉さんはご自分のご用をなさりにいらしてくださいまし。わたくし、晩までには品物を取ってまいり、まずお姉さんに申し上げたうえでお届けに上がりますが、それでいかがでしょうか？」

「ええ、でも、晩になってもこないでおいて、わたしを怨みだてしても知りませんよ」

と、平児が念を押します。そこで二人は立ち別れ、それぞれ引き取りました。

平児が部屋にもどると、熙鳳がこう聞きました。

「探春ちゃんはあるたをお呼びになって、なんのご用だったの？」

平児は笑って、

「三の姫さまは奥様がお腹立ちではないかとお懸念なされ、おまえから奥様にちと取りなしてほしいとのことで、なおまた、奥様はこのところ少しはなにか召し上がっていらっしゃいますかとおたずねがございました」

熙鳳は笑いながら、

「それはそれは、あちらにはよくお心に掛けていてくださったこと。それはそうと、さっきまた一つ事件が持ち上がったのだけれどね。柳二の内儀さんは妹と組んで賭場を開帳し、妹のしたことも実はみな姉が采配をふっていたのだと、そんなことをいつてきた者があるの。それでわたし、思ったのだけれど、あんたは日頃わたしに口癖のように勧めておくれだったね、『一事を増すは一事を省くに如かず』、そうすれば少しなりとのんびりでき、自分で養生に努めることもできようから、そ



自己保养保养也是好的。我因听不进去，果然应了些，先把太太得罪了，而且自己反赚了一场病。如今我也看破了，随他们闹去罢，横竖还有许多人呢。我白操一会子心，倒惹的万人咒骂。我且养病要紧。便是好了，我也作个好好先生，得乐且乐，得笑且笑，一概是非，都凭他们去罢。所以我只答应着知道了，白不在我心上。”平儿笑道：“奶奶果然如此，便是我们的造化。”一语未了，只见贾琏进来，拍手叹气道：“好好的又生事！前儿我和鸳鸯借当，那边太太怎么知道了！才刚太太叫过我去，叫我不管那里先迁挪二百银子，做八月十五日节间使用。我回没处迁挪。太太就说：‘你没有钱，就有地方迁挪；我白和你商量，你就搪塞我，你就没地方。前儿一千银子的当是那里的？连老太太的东西你都有神通弄出来，这会子二百银子你就这样。幸亏我没和别人说去。’我想太太分明不短，何苦来要寻事奈何人。”凤姐道：“那日并没一个外人，



うしたがよいとね。それをわたしは聞き入れなかったものだから、とうとう罰が当たって、まず奥方さま（邢氏）のご不興を買い、そればかりか自分はこんな病氣まで拾いこむ始末さ。いまになってわたしも目が醒めたわ。騒ぎたがる者たちには勝手に騒がせておこうよ。どのみち役者ならまだ大勢控えていなさることだからね。まったくわたしは、あだに気苦労ばかり重ねてきたようなもの。万の人から悪しざまにいわれるのがその報いなのだからね。いまのわたしにはわが身の養生がなによりも肝腎。たとえ元気になったあとでも、わたしはもう好し好し先生を決めこんで、楽しめるものは楽しみ、笑えるものは笑い、是非は万事いいたい人まかせにしておくの。だからわたしはこんどのことも、ただわかった、と返事だけはしたものの、いっこう気にも留めていないのよ」

といいました。平児は笑いながら、

「奥様がほんとにそうなさってくださいましたら、それこそわたくしどもの仕合わせと申すもので」

と、そのことばも終わらぬに、賈璉がはいってきて、「ポン」と手を拍つなり、ため息ついて、

「なぜまた、わけもないのにこう厄介な事が持ち上がるのだろう。せんだってわたしが鴛鴦に頼んで質種を借りたことが、どうしてあちらの奥方さま（邢氏）のお耳にはいったりしたものか、いまさっきお呼び出しがかかって、『どこからでもよい、取りあえず二百両の銀子を都合しておくれ、八月十五日のお節句の出費に充てるのだから』、とこうだ。それでわたしが、都合つける当てがございません、と申し上げたら、奥方さまは即座にこうおっしゃった、『あんたにお金の持ち合わせがないとしても、都合のつく先はあるはず。わたしがただ相談を持ちかけただけで、あんたはとたんに当てがないと逃げを張るが、せんだっての一千両の銀子の質種の出どこはどこなの？ あんたはご後室さまの品物でさえもらいこむほどの腕前の持ち主ではないの。そのくせいま二百両の銀子くらいのことで、もうそのありさまだからね。このことは、さいわいわたしが他言してないから、よいようなものだけれど』だとさ。どう考えても奥方さまのお手元がそんなに詰まっていよう道理はないのだが、なにを思ってわざわざこんな人騒がせな難題を吹っかけたりなさるのだろう」

とこぼします。熙鳳はそこで、

谁走了这个消息？”平儿听了，也细想那日有谁在此，想了半日，笑道：“是了。那日说话时没一个外人，但晚上送东西来的时节，老太太那边傻大姐的娘也可巧来送浆洗的衣服。他在下房里坐了一回子，见一大箱子东西，自然要问，必是小丫头们不知道，说了出来也未可知。”因此便唤了几个小丫头来问：“那日谁告诉傻大姐的娘来？”众小丫头慌了，都跪下赌咒发誓，说：“自来也不敢多说一句话。有人凡问什么，都答应不知道。这事如何敢说。”凤姐详情说：“他们必不敢多说，倒别委屈了他们。如今且把这事靠后，且把太太打发了去要紧。宁可咱们短些，又别讨没意思。”因叫平儿：“把我的金项圈拿来，且暂押二百银子来送去完事。”贾琏道：“越性多押二百，咱们也要使呢。”凤姐道：“很不必。我没处使





「さあ、あの日、よその人間は一人もいなかったのに、誰がそんなことを洩らしたのか？」

それを聞いた平児は、はて、あの日は誰と誰とがここにいたかな、としばらく考えていたすえ、笑いながらいいました。

「あ、そうですわ。あの日、話をしていたときにはよその者は一人も居合わせませんでした。夕方現物を届けてまいったときに、ご後室さまのところに馬鹿姉やの母親が、やはりちょうど洗い張りをした着物を届けてまいりました。あの人は下部屋でしばらくはなしこんでいたようでございますから、大きな品物の箱を見て、自然あれはなにかとたずねたに相違なく、それできつと若い子たちが見さかいなしにしゃべったものかも知れません」

というわけで、さっそくいくたりかの侍女見習を呼びつけて、

「あの日、誰が馬鹿姉やの母親にあのことを洩らしたの？」

とたずねます。侍女見習たちはうろたえて、みなべったり跪き、誓いを立てて、

「これまでも余計な口などひとことたりと利いたことはなく、人からなにか聞かれるようなことがございまして、すべて存じませんで通しております。そんなことをどうして自分から口にしたりいたしましょう！」

といいます。熙鳳はその様子から推して、

「この子たちがまさか余計なおしゃべりをするとも思えないから、もう濡衣きせるのはおよし。いま差し当たってその件は後に廻し、ひとまず奥方さまのお顔を立ててお引き取り願うのが先決だわ。わたしたちの方が少しは詰まってくるようなことになっても、このうえまたつまらぬ目をみるよりはましだからね」

こういって、そこで平児に、

「では、わたしの金の首飾りを出しておいで。あれを抵当に取りあえず二百両の銀子を作って届けたら、けりがつこうよ」

と指図します。すると賈璉が、

「いっそのこと抵当をふやして、もう二百兩余計に作ろうや。わたしたちだって出費があるのだからな」

と言い出しました。熙鳳は、

「その必要はありません。わたくしにはお錢を使うことなどないのですからね。いまの分だけでも、これでいったん手許から放したが最



钱。这一去还不知指那一项赎呢。”平儿拿去，吩咐一个人唤了旺儿媳妇来领去。不一时，拿了银子来，贾琏自然送去。不在话下。这里凤姐和平儿猜疑终是谁人走的风声，竟拟不出人来。凤姐儿又道：“知道这事还是小事。怕的是小人趁便，又造非言，生出别的事来。打紧那边正和鸳鸯结有仇了，如今听得他私自借给琏二爷东西，那些小人眼馋肚饱，连没缝儿还要下蛆的，如今有了这个因由，恐怕又造出些没天理的话来，也定不得。在你琏二爷还无妨，只是鸳鸯正经女儿，带累了他受屈，岂不是咱们的过失。”平儿笑道：“这也无妨。鸳鸯借东西，看的是奶奶，并不为的是二爷。一则鸳鸯虽应名是他私情，其实他是回过老太太的。老太太因怕孙男弟女多，这个也借，那个也要，到跟前都撒个娇儿，和谁要去；因此只装不知道。纵闹了出来，究竟那也无碍。”凤姐道：“理虽如此，只是你我知道的；不知道的焉得不生疑呢。”



後、請け出せる当てがどこにございまして？」

とっておさえます。平児はそれを持って出て、侍女見習の一人に旺児の妻女を呼んでこさせ、これに持ってゆかせます。だいぶしてから銀子を持参しましたので、賈璉がそれを届けたのはむろんのことですが、その話はそれまで。

こちらは熙鳳、平児と額をあつめて、それにしてもいったい誰がそんな噂を洩らしたのだろうか、とあれこれ推量してみましたが、結局誰とって見当もつかずじまい。熙鳳はそこでまた、

「それだけなら知れたところで、まあ大したこともない。恐いのはつまらぬ手合いが得たり賢しとまた妙な評判を立て、ほかへ飛び火することだわ。第一あちらは鴛鴦とは仇同士の仲、そこへいまこうしてあの子が一存で璉どのに品物を貸し出したことを耳にされたわけなのだからね。ああしたろくでもない手合いは意地ぎたなくて、『裂け目のないところにまで蛆を生みつけ』てやろうとねらっているのだし、いまこんなもってもらしい理由ができたからには、またぞろ道理もなにもないような話をでっちあげないとも限らないわ。璉どのの方はまだしも差しつかえないようなものだけれど、なにせ鴛鴦はまともな子だし、あの子に側杖食わせてつまらぬ目に遭わせたりしたのでは、わたしたちの落ち度というものではなかろうかね」

といいます。平児は笑いながら、

「いえ、その方もさわりはございませんの。鴛鴦さんが物をお貸しいたしましたのは、奥様のお顔を立ててのことで、御前様のためになにしたわけではさらさらなし。二つには、鴛鴦さんは、表向きこそあの方が内緒事をしている態に見せかけてありますものの、実はあの方はちゃんとご後室さまのお耳に入れているのでございますよ。ご後室さまは、お孫さまやお孫娘さまがずいぶんと大勢いらっしゃいますので、こちらからもお借りしたい、あちらからもお願いしたいというぐあい、お膝もとにみな寄ってみえて、甘えすがられました日には、どなたのところへもらいにいらしたらよいかという話にもなりかねません。それがあって、ご存じないふりをしていらっしゃるまで。よしんば表沙汰にされたところで、結局そのことではなにもさわりはないわけでございます」

「理屈はまあそうだろうよ。でも、おたがいならわかっていながらなんだけれど、わからない者になると、どうしても疑いを差しはさまずにはおられまいからね」



一语未了，人报：“太太来了。”凤姐听了诧异，不知为何事亲来，与平儿等忙迎出来。只见王夫人气色更变，只带一个贴己小丫头走来，一语不发，走至里间坐下。凤姐忙奉茶，因陪笑问道：“太太今日高兴，到这里逛逛。”王夫人喝命：“平儿出去。”平儿见了这般，不知怎么样了，忙应了一声，带着众小丫头一齐出去，在房门外站住。越性将房门掩了，自己坐在台阶上，所有的人一个不许进去。凤姐也着了慌，不知有何等事。只见王夫人含着泪，从袖内掷出一个香袋子来，说：“你瞧。”凤姐忙拾起一看，见是十锦春意香袋，也吓了一跳，忙问：“太太从那里得来？”王夫人见问，越发泪如雨下，颤声说道：“我从那里得来！我天天坐在井里，把你当个细心人，所以我才偷个空儿。谁知你也和我一样。这样的东西，大天白日里明摆在园里山石上，被老太太的丫头拾着。不



と、熙鳳がそのことばを言い終えないうちに、取次ぎの者がきて、
「奥方さまがお越しになりました」

と伝えました。それを聞いた熙鳳、不審でならず、いったいなんのご用でじきじきお越しになったのかと、平児らとともにいそぎ出迎えます。すると奥方の王氏、気色もなにもすっかり変わり、側仕えの侍女見習をただ一人だけあとに従えてやってきて、ひとことも口を利かずに、奥の間に通って腰をかけました。熙鳳はあわててお茶を出し、そこで愛想笑いを浮かべながら探りを入れ、

「奥方さまには今日はお気が向かれましたか、かようなところまでようこそお運びで……」

すると王氏は、声あららげて、

「平児は出ておゆき！」

と命じました。平児はそのさまをみて、いったいどうしたことかと、あわてて「はい」と答えるなり、侍女見習たちを従えていっせいに出てゆき、部屋の戸口の外に立ちます。そして思い切って部屋の戸を閉てしまい、自分は踏み段に腰をおろしたまま、誰一人なかへは立ち入らせません。

熙鳳もさすがにうろたえて、いったいなにごとが起こったのかと思うばかり。すると奥方の王氏が涙ぐみながら、袖のうちより香袋一つ取り出して投げてよこし、

「よくまあ見るがよい」

というではありませんか。熙鳳はいそぎこれを拾い上げ、よくよく見れば、なんとそれがさまざまな図柄をぬいとった春画の香袋だとあって、これにはびっくり仰天、あわてて、

「奥方さまにはどこでご入手なさいました？」

とたずねます。奥方はそう聞かれて、なおさら涙を雨のように流しながら、声ふるわせていうのでした。

「わたしがどこで入手したかと聞くのですか！このわたしなど、毎日を井戸のなかに坐って過ごしているも同然、あんたをこまかいところまで気のつく人だと当てにしていたればこそ、わたしも吞気にしていたのよ。ところがどうでしょう、あんたもわたしと変わりなし。こんな品を真昼間、はばかりもなく園の築山の石の上に置き放し、ご後室さまづきの見習に拾われたりするのだからね。これであんたのお姑さん（邢氏）が出会われたからまだよかったようなものの、さもなければ、



亏你婆婆遇见，早已送到老太太跟前去了。我且问你，这个东西如何遗在那里来？”凤姐听得，也更了颜色，忙问：“太太怎知是我的？”王夫人又哭又叹，说道：“你反问我！你想，一家子除了你们小夫小妻，馀者老婆子们，要这个何用！女孩子们，是从那里得来！自是那琏儿不长进下流种子，那里弄来。你们又和气，当作一件玩意儿，年轻人儿，闺房私意是有的。你还和我赖。幸而园内上下人还不解事，尚未捡得。倘或丫头们捡着，你姊妹看见，这还了得；不然，有那小丫头们捡着出去，说是园内捡着的，外人知道，这性命脸面要也不要！”凤姐听说，又急又愧，登时紫涨了面皮，便依炕沿双膝跪下，也含泪诉道：“太太说的固然有理，我也不敢辩我并无这样的东西。但其中还要求太太细详其理。这香袋是外头雇工仿着内工绣的，带这穗子一概是市卖货，我便年轻不尊重些，也不要这劳什子，此是一。二者，这东西也不是常带着的，我



とつくにご後室さまのところへ届けられていましたよ。では、ひとつあんに聞きましょう、こんな物をなぜあんなところへ置き忘れたのです？」

熙鳳は聞くなり、さすがに顔色を変え、忙きこんで、

「奥方さまにはなにゆえわたくしの持ち物だと見極められたのでございましょうか？」

と聞き返します。奥方は泣いてはため息をつくといったふうで、

「あなた、よくも聞き返せたものだこと！ 考えてもみなさい、屋敷じゅうであなたたち若い夫婦を除けたら、ほかは婆やたちばかり、あれらがこんなものをなんに使うとおいしいなの？ 女の子たちにはこんなものを手に入れるさきもないはず。むろん、あのろくでなしの下種の璉ちゃんがどこかで手に入れてきたのに決まっています。あなたたちは仲睦まじいし、恰好な玩具にしていたのでしょう。若い人たち同士だから、閨房のうちに好きなまねをするなどありがちなこと、それでもあなたは、わたしに向かってしらを切る気なの？ さいわいなことに園内の者たちは上も下もまだこの件は知らずにいるし、あれらに拾われずに済みました。これでもし若い子たちにでも拾われて、あなたの姉妹たちの目に触れようものなら、いったいどういうことになります？ さもなくて、あの見習たちの若いのが拾い当てて外部へ持ち出し、これは園内で拾ったものだといっているのを外部の人に知られでもしたら、この生命もこの面目も惜しいどころの話ではないわ！」

いわれて熙鳳、気はいらだつし恥ずかしくはある、さっと顔を紫色に腫れ上がらせ、べったり炕のへり浴いにもろ膝折って跪き、涙ながらに訴えました。

「奥方さまの仰せはもとよりごもつとも千万、わたくしとて自分がかようなものは持たぬなどと言ひ開きをするつもりは毛頭ございません。ただ、それにつきまして、やはり奥方さまにこういった理屈をよくお考えいただきとうございます。この香袋は外部で職人を使って内裏製のに似せてぬいとらせたもの、このような総をつけてありますのは、すべて町で売っておる品でございます。わたくし、いくら若気の至りだとは申せ、かようなくだらぬ代物など欲しがったりはいたしません。まずこれが一つでございます。

二つには、かような品はいつも身につけているものではなく、わたくしが仮りに持っていたとしましても、やはりうちにばかり置いておく



纵有，也只好在家里，焉肯带在身上各处去；况且又在园里，个个姊妹，我们都肯拉拉扯扯，倘或露出来，不但在姊妹前，就是奴才看见，我有什么意思。我虽年轻不尊重，亦不能糊涂至此。三则论主子内，我是年轻媳妇，算起奴才来，比我更年轻的又不止一个人了。况且他们也常进园，晚间各人家去，焉知不是他们身上的。四则除我常在园里之外，还有那边太太常带过几个小姨娘来，如嫣红翠云等人，皆系年轻侍妾，他们更该有这个了。还有那边珍大嫂子，他不算甚老，他也常带过佩凤等人来，焉知又不是他们的。五则园内丫头太多，保的住个个都是正经的不成，焉知年纪大些的，知道了人事，或者一时半刻，人查问不到，偷着出去；或借着因由，同二门上小么儿们打牙犯嘴，外头得了来的，也未可知。如今不但我没此事，就连平儿，我也可以下保的。太太请细想。”王夫人听了这一席话大近情理，因叹道：“你起来。我也知道，你大家小姐出身，焉得轻薄至此。不过我气急了，拿了话激你。但如今却怎